

Title	デカルト「情念論」の研究(一)
Author	西村, 嘉彦
Citation	人文研究. 20 卷 3 号, p.151-165.
Issue Date	1968
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

デカルト「情念論」の研究（一）

西 村 嘉 彦

1. 「情念論」の成立

デカルトの感情論を研究しようとするとき、われわれが利用し得る資料は「情念論」およびエリザベット、クリスチナ宛の書翰が中心になると言ってよいだろう。「情念論」はデカルトが自分の手で公刊した最後の著作である。それまではこの種の問題を取り扱った論文や著書がなかったので、デカルトの体系的哲学を期待するものにとってはまことに貴重な労作と言わねばならない。数学や物理学の方面に造詣の深かったデカルトにとって、情念の問題は決して処理しやすいテーマと言えないわけであるが、それでも、あれだけ自信にみちた思索と執筆とを続けてきたデカルトが、生涯の終り近くになって情熱こめて書き上げたものだけに、なかなか味わいぶかい名作と言わねばならない。

「情念論」*Les Passions de l'âme* 執筆への機縁を与えたものは薄幸の王女 Elizabeth (1618—80) が、わが師と仰ぐデカルトに向けた数々の質疑であったと言われている。エリザベット王女はボヘミア王フレデリックの娘で、父王が1620年王位を失うにおよんで、母とともにオランダへ遁れて来たが、資性明敏で学問に興味をもち、その当時名声高かったデカルトに私淑、その教えを請おうとしたのである。デカルトもまたこのうら若き王女の不幸に同情し、且つその才と美とをこよなく愛したのであろう、まことに懇切な返書をしたためている。二人の間に交わされた問と答が機縁になって「情念論」の構想ができ上がったとするなら、この二人の友情は実に貴重な成果を作りあげたものと言えよう。

『殿下がわざわざ御親書をもちまして、私に御下命くださる御殊遇を賜りましたことは、私にとって願ってもない身の光栄でございます。……』との書き出しをもった1643年5月21日付の手紙はエリザベットとデカルトとの出会いを記念するものとしてまことに興味ぶかい。これ以後デカルトがエリザベットに宛てたいくつかの手紙は確にどこかわれわれの心の琴線に触れるものがあるようだ。そうして手紙の内容から窺知できるかぎり、1645年11月3日付のエリザベット宛書翰で、デカルトは自分がそのころ、情念の本性を一そう詳しく検討できるように、それらの情念の数と順序とについて考えたことを記しており、「情念論」の構想がかなり進んでいることを示している。そこから史家は「情念論」がおそらく

1645～1646年の冬の間に書き上げられたのであろうと推測している。⁽²⁾ スウェーデンのクリスチナ女王に贈られた稿本もこのとき書かれた原稿のコピーであったろう。ただし、この段階で提示されたものは「情念論」三部のうち初めの二部だけであつたらしく、その第三部は今すこし後で付け加えられたようである。

ともあれ、この書が公刊されたのは1649年11月の終りごろパリの Henri Le Gras 書店を通じてであつた。ただし、この書が印刷されたのはアムステルダム の Louis Elzevier 書店においてであつたと言われており、おそらく両書店のあいだに予め取り決めがあつたのであろう。そしてそれは当時としては決して珍しい出来事ではなかつたのである。デカルトも スウェーデンに 向けて 出発する前に (1649年 9 月の初め) その校正刷に目を通す時間をもっていたらしい。1649年 11月末といえはデカルトがストックホルムに到着後しばらく経つての頃であつた。さきにも述べた通り、「情念論」執筆のきっかけとなつたエリザベット王女との出会いは1643年 5 月であつたが、その時から「情念論」の公刊された1649年11月までの 5 年有余は言わばデカルトの晩年の時期にあたり、しかもその期間は彼にとって決して安らぎの日々と言いがたく、彼の身边にもいろいろな出来事が渦巻いていたのである。哲学史家にとってこの間の事情を丹念に解明することは興味もあり、有益でもあるが、その方面のことは専門の研究者たちの教示を待ちたく、筆者の切実な関心はこの書物の内容を自分なりに理解することであるので、背景の事情にたいする無知からあるいは誤解や誤読がでるかも知れないが、わたしとしては、とにかくこの書物の記述内容を中心に考察してみたい。

注(1) デカルトは「哲学原理」の初めにエリザベットへの献辞を記している。

注(2) 1646年 4 月16日エリザベットはデカルトの書き上げた情念論を手に入れている。

2. 「情念論」の目指すもの

「情念論」は全部で212節、それらは三部にわかれ、第一部(1—50)は情念一般について、第二部(51—148)は情念の数と順序、六つの基本情念について、第三部(149—212)は特殊情念について述べられている。

第一部は *Des passions en général et par occasion de toute la nature de l'homme* と題されているように、情念一般を論ずることが結局「人間性」全般

を論ずることに関連してくることをはっきり意識しているのである。人間性ということばはそれ自体として決して明瞭な意味内容を示してはいない。併しこのことばが思想史のなかで強調せられるのは、生きている人間の豊かな内容、その価値があらためて人びとの関心の的になってくるときと解せられる。その意味でルネッサンスは一つの重要な時期であった。それは確に大きな変動期であり、この激動期を乗り切っていく人間自身に反省的考察が払われたことは当然であった。ただし、この時期に考察された「人間学」は、人間に関するなんらかの先入観や価値的規範から解放されて、いわば、自由な眼、自由な観点から人間の思想や行動を見直そうとするものであって、どちらかと言えば人間全体の枠組や動向を再検討せんとする巨視的な見方に力点がおかれていたように思える。

もちろん「人間学」はただ人間の観想的な反省に終始するものではない。それはいつも、人間いかに生くべきか、の実践的関心と強く結びついている。人間である以上、生活の指針、生活の指導理念はつねにその重大関心事でなければならない。ただこの指針や理念が比較的安定している時期と、そうでない時期とでは、実践的関心への強さが相当ちがってくることは当然予期せられることであろう。

フランスだけを例にとっても、16世紀の激動はすさまじかった。特にその後半は宗教戦争の嵐が全国に吹き荒れ、神の名のもとに多くの尊い血が無残にも流されている。信仰の純粹性をもとめる声と、富と権力とをめざすあくなき野望とが、それぞれの錦旗のもとに奇妙な結集をしたとも言える。しかしこの狂乱のただ中でも、中正をもとめ寛容を説くヒューマニストの叫びがなかったわけではない。そのようなヒューマニストの人間論は学問的にも中々貴重な研究資料である。

デカルトの「情念論」が出来上ったのは17世紀も半ばに近く、フランスの政情も一段と安定性を増して来た時期である上、それが成立した場所もオランダであった。政治的、宗教的紛争の渦中に巻き込まれることをきらったデカルトの人間学は、はるかに学問的な形態をとり、生理学的ならびに心理学的考察の色彩をあざやかにしている。それは人間の尊重を説くことに重点をおいた人間学の枠を越えて、人間の本性に関する学問的分析を中心にすえた人間学、なにかんづく感情生活を中心テーマにした人間学である。それは感情が人間性全般のなかで占める位置の重要さの認識から来ているであろう。デカルトの「情念論」は感情の心理学的分析の近世的な雛型を作ったものと言ってよい。だが、それは同時に感情の研究を介して人間の生活、人間の実践の問題に洞察と解決の手がかりを与えようとしたものであり、道徳学的関心と切りはなして論ずるわけにはいかない。

偉大な科学者であると同時に体系的な思想家であったデカルトの著作の中で道徳に関するまとまった著書が見当たらないのは何かもの足りない気がするが、彼の道徳学説について掘るべき資料がないわけではない。基本的な立場は「方法叙説」にも素描されているし、いくつかの書翰のなかにも彼の見解は看取できる。「情念論」も単なる情念の心理学的分析で終わっているのではなく、基本的情念や特殊情念を論じている際それが我々の実践生活とどのようなからみ合いをもち、どのような重要性をもっているかをかなり突っこんで説明してくれている。それにデカルト自身の生き方がなによりも雄弁に彼の道徳説の方向を明示しているといえてよい。

「情念論」は精神と物体、心と体とを峻別したデカルトが、今度は両者の結合、交通の場を見出すために苦心した労作であると言われている。確かにそれはデカルトにとっても難しい問題であったろう。魂と身体を分離すること、それは「省察」の中心問題の一つであったが、両者の分離は単に形而上学的な省察から要請された命題にとどまっただけで、生理学者デカルトの観察と実験にもとづいた確証的な命題でもあった。そうして「情念論」第一部、7～16節にもこの人間身体の生理学が簡潔に述べられている。しかもそれがここで要約されているのは「心の情念が何であるかを知るために心の機能と身体の機能とを区別しなければならぬ」という第二部の要請にこたえんがためであった。生理学的叙述が目指すものはあくまで「情念」の位置づけを知ることであって、身体そのものを *automate* (P. A. I, 6) と考えるデカルトは、その生理学的機能を充分確認した上で、情念がどの点でそれらの機能とむすびつくかを検討しようとしたのである。

ところで、身体の機能と区別された心の機能とは如何なるものであろうか。『熱および肢体の運動は身体より生じ、想念 (*pensées*) は心より生ずる』(P. A. I, 4) *pensées* とは思考されるもの全般、意識現象全体といえてよい。この *pensées* が二種類に分かれ、一つが「心の能動」、他が「心の受動」とであるとされる。ところで *les passions de l'âme* は「心の受動」とするとともに「心の情念」でもある。フランス語では同一のことばであっても、原文のコンテクストのなかでは意味内容をすこし分けて理解しなければならない。我々はまずこの言葉づかいの阿ヤから理解を始めていく必要がある。その意味でも「情念論」の各節を少していねいに読み返すべきであろう。

注(1) デカルトはスコラの先人たちとちがって、情念の研究を、「心と身体との相違の吟味」(*d'examiner la différence qui est entre l'âme et le corps*, I, 2)

から始めようとしている。その意味は、我々のうちにある機能のそれぞれが一体心と体とのどちらに帰属するかを知るために必要だから、とされているが、これはまた、例えば「心が体に運動と熱とを与える」と説くような従来の学説の誤謬を真向から論駁しようとしているのである。

3. 心の能動と受動

「情念論」冒頭の節でデカルトは能動と受動とについてこう述べている。『ある主体より見て受動であるものは、ほかの観点においていつも能動である。』（*Que ce qui est passion au regard d'un sujet est toujours action à quelque autre égard*, I, 1）さらに第1節の説明のなかで次のように述べられている。すべて新しく作られたり、生起してくるものは一般に、それが生起する主体より見れば受動であり、それを生ぜしめる主体から見れば能動である、と哲学者たちによって呼ばれている。したがって、働くもの（*l'agent*）と働きかけられるもの（*le patient*）とは非常にちがっている場合がしばしばあるにも拘らず、それでも能動と受動とはいつも同一のものである、ただそれが関係づけられる主体がちがっているためにその名称が異なってくるにすぎないと。

ところで、能動と受動とに関するこの一般的定義が心の働きについても適用されているのに気がつく。第17節では、さきにも述べたとおり、心の機能としての思惟（*pensées*）が二種類に分けられ、その一つが心の能動（*les actions de l'âme*）であり、他が心の受動（*les passions de l'âme*）であるとされている。心の能動とは我々の意志のすべて（*toutes nos volontés*）である。ただし、この意志は直接に心から来るものであり、心にのみ依存しているらしいことを我々は経験しているからである。それと反対に、われわれのなかに存在するあらゆる種類の知覚や認識（*perceptions ou connaissances*）は「心の受動」と名づけられる。ただし、それらをかくあらしめるものが、多くの場合、われわれの心でないからであり、また心はいつもそれらを、それらが表象している事物から受けとるがためである。（cf. I, 17）

上記の箇処からわかるように、心の能動とはあらゆる種類の「意志」であり、心の受動とはあらゆる種類の「知覚や認識」である。ただし、「あらゆる種類の……」ということは、それらが一般的に理解されていることを、つまり一つの類概念であることを意味しているのであって、それぞれのなかでもう少し種類わけ

がなさるべきことを暗示している。

すなわち、意志についても、(1)心そのもののなかで終結する働き (des actions de l'âme qui se termine en l'âme) と(2)われわれの身体において終結する働き (des actions qui se terminent en notre corps) とが区別せられ (I, 18), 前者は、われわれが神を愛しようとしたり、また一般的に非物質的ななんらかの事物を思惟しようとするときの心の働きであり、後者はたとえば散歩しようとする意志をもつときに、それにつれて脚が動き出し、散歩の動作にはいるときの働きである。デカルトが例示した第一の種類の意志は、言ってみれば、形而上学的な意志作用であり、それに対して、第二種の意志はわれわれが普通に理解している意志であろう。ただし後者の意味の意志にデカルトはさほど大きな関心を払っているようには思われない。

意志が二つの種類に分けられたように、「知覚」もまた二つに分類せられる。その一つは心をその原因とするものであり、もう一つは身体を原因とするものである。(I, 19) 心を原因とする知覚は、われわれの意志、意志に依存する一切の想像、もしくはその他の想念についての知覚である。⁽¹⁾

ところで、或るものを意志するというのは、心から見れば一つの能動であるが、心が意志していると知覚することは、また心において一つの受動である。しかし、この知覚とこの意志とは実際には同じものであるから、呼び方としては普通高尚な方をとって受動とは言わずに「能動」と呼ぶと述べられている。(I, 19)

これに対して、身体を原因とするものは「受動」と規定されるのである。そして身体を原因とする知覚はすべて「神経を媒介として心に達する」(I, 22)のであるが、それらも三つの種類に分けられる。(1)われわれの外に存在する事物に帰せしめられる知覚 (I, 23), (2)われわれの身体もしくはその或る部分に帰せしめられる知覚 (I, 24), (3)心に帰すべき知覚 (I, 25) である。

(1)に属するものは、例えば蠟燭の光を見たり、鐘の音を聞いたりするようなもので、それらの光や音はそれぞれ異なった二つの働きで、神経の媒介によって脳のなかに二つのちがった感覚(サンチマン)⁽²⁾を与える。しかもこれらの感覚をそれらの原因とみられる事物に強くむすびつけて考えるから、われわれはこれらの事物からやって来る運動だけを感じるのではなくて、蠟燭そのものを見、鐘そのものを聞くように思うのである。

(2)に属するものは、ひもじさや渇き、その他の自然的欲望、また苦痛や熱、そのほか我々の外がわにある事物のなかにでなくして、自分たちの肢体の中にある

ように感じるところのいろんな感覚である。

(3)のなかに数えられるものは、例えば、喜び、怒り、その他これに類する感情で、それらは神経を刺戟する事物によって我々のなかに起こることもあり、またそのほかの原因によって起こることもある。

これら三種類の知覚を要約すれば、(1)は外部知覚、(2)は内部知覚、(3)は感情、であると言えよう。

ところで、外部対象に帰せらるべき知覚も、身体のさまざまな感覚に帰せらるべき知覚も、*passions* という語をもっとも広い意味に解するならまさしく *passions* であるにかかわらず、普通はそれを狭く解して、心そのもののみに帰せられるところの知覚、つまり、心そのものの中にその結果が感じられるような知覚である。デカルトが「心の情念」という名のもとに説明しようとしたのは、まさにこの狭い意味の *passions* なのであった。

このような *passions* の語義の多様性が我々の理解を困難ならしめる一つの大きな原因であるが、デカルト自身の立場よりすれば、*action* と *passion*, *âme* と *corps* の区別とそれらの相関性こそ彼自身の人間学、人性論を展開するに不可欠な概念であったのであろう。ただ狭意のバション（情念）を抽出して、その分析に終始することは決して彼の本意でなかったことを我々も充分理解しなければならない。単なる感情の心理学でなく、人間学、倫理学という大きな視野のなかで感情の問題が取り扱われるべきことを忘れてはならない。

〔要約〕

I 一般的意味としての能動と受動

l'action (能動) } これら両者は本来異なるものでなく、関係づけられる主
la passion (受動) } 体に応じて能動とよばれ、受動とよばれるだけである。

II *pensées* の二つの種類としての能動と受動

1 *les actions de l'âme* (心の能動)

= *toutes nos volontés* (すべての我々の意志)

volontés { 心そのもののなかで終結する働き
 { 身体において終結する働き

2 *les passions de l'âme* (心の受動)

= *toutes les sortes de perceptions ou connaissances*

(あらゆる種類の知覚ないし認識)

perceptions (知覚)

〔心をその原因とするもの……これらはむしろ能動と規定されるもの
身体を原因とするもの ……まさしく受動と規定されるもの

- 1° 外的事物に関係づけられる知覚
- 2° 身体またはその部分に関係づけられる知覚
- 3° 心そのものの中にその結果が感じられる知覚

= *les passions de l'âme* (情念)

= *émotions, sentiments, affections* (感情, 情動)

注(1) 心を原因とする知覚のうち「意志に依存する想像」については第20節で説かれている。そこでは、心が例えば魔法の宮殿や半人半獣の怪物を想像しようとするとき、心がそれらについてもつ知覚は、主として心がそれらを知覚せしめる意志に依存するから、受動と言わずに能動と呼ばれる。また「心によって作られるその他の想念」としては、心が自分自身の本性を考えるときのように、決して想像されずに (*non point imaginable*) ただ理解され得る (*seulement intelligible*) ようなものを考えるとき、それを知覚するのは結局それらを知覚せしめる意志に主として依存するから能動と考えられるとされる。

いずれにしても「心を原因とする知覚」はむしろ「能動」と規定される。しかしここで区別された二種類の知覚は、どちらも *perception* ということばによって言表されているかぎり、これ以外の箇所、また「情念論」以外で用いられている「知覚」の名辞が一体どちらの意味で言われているかを一々考慮してみなければならぬので至極厄介なことである。

注(2) *sentiment* は邦語に移しにくい、平凡に訳せば「感じ」であろう。ただデカルトではかなり広い意味に使われているので、あるときには「感覚」、他のときには「感情」と訳した方がいい場合が出て来る。

4. 心の情念

前節に述べたように、デカルトは広義の知覚を三つの種類に分ち、情念をば「心にのみ帰せられる知覚」 (*les perceptions qu'on rapporte seulement à l'âme*, I, 25) に限定せんとするものであるが、この意味の情念はまた、動物精気の運動によって惹きおこされ、且つそれによって保持されると考えられており、このような動物精気の仮設を導入することによってデカルトは情念を一方的

に心のがわに追いやることなく、常に心・身相関の場においてとらえようとする姿勢をたもつことが出来たのである。

さて「心の情念」または簡単に「情念」と呼ばれるものはデカルトによってどのように定義されているであろうか。情念とは『特に心に帰せらるべき知覚、感覚、または心の情動であり、且つそれらは（動物）精気の或る種の運動によって惹きおこされ、保持され、強められる』（des perceptions, ou des sentiments ou des émotions de l'âme qu'on raporte particulièrement à elle, et qui sont causées, entretenues et fortifiées par quelque mouvement des esprits. ⁽¹⁾ I, 27）そしてこの定義に関するもう少し詳しい解説がa.28, 29においてなされている。

(1) 知覚なる語を広く用いて、それを心の能動でもなく、また意志でもないすべての pensées（思惟、想念、意識の働き）を意味するなら、情念を知覚と名づけることができる。しかしもしその語を明白な認識（connaissances évidentes）の意味にのみ用いるなら、情念を知覚と呼ぶわけには行かない。なぜなら、情念によって最もはげしく動かされる人は、それを最もよく知る人ではないから。

(2) そういう情念が心のなかに受け取られる仕方は、外部感覚（sens extérieurs）の対象が受けとられる仕方と同じであるから、それは sentiments と名づけられることができる。

(3) いや、むしろ émotions de l'âme と呼んだほうが一そう適切である。けれど、émotions なる名称は、心のなかに生ずるあらゆる変化、すなわち、心に生じる凡べてのさまざまな想念に与えられるだけでなく、心の持ち得るあらゆる種類の想念のなかで、この情念ほど強く心を動揺させるものがないからである。

（以上、I, 28）

(4) これらの情念が特に「心に関係する」と付け加えられるのは、匂い、音、色のように、外的事物に帰せしめられる感覚、また、飢え、渇き、苦痛のように身体に帰せしめられる感覚から区別するためである。

(5) これらの情念が精気の或る種の運動によって惹きおこされ、保持せられ、強められると言ったのは、この情念をば、心に関係はするが、しかし心自体によって惹きおこされるところの des émotions de l'âme と名づけられる意志（volontés）から区別するためである。

(6) 情念をばその他のサンチマンから区別するところの最終的・最近因を説明するためである。⁽²⁾（以上、I, 29）

上の二つの節から注意せられることはデカルトが情念をば、特に心に帰すべき

知覚、感覚、心の情動、であるとは言っているが、実際は *perceptions* や *sentiments* というよりは、*émotions de l'âme* と呼んだ方が一層適切であると述べている点である。*passions* と *émotions* とは語源的には対蹠的といってもよいほど大きな違いをもっている。それにも拘らず *émotions* という呼称をより一そうこのものしいとしているのは情念がやはり心の乱れ (*dérèglements*) をその日常的な在り方としているがためであろう。17世紀には *sentiment*, *passion*, *émotion* など今日の心理学者たちがかかなり厳密に使い分けられているところのカテゴリー的用語の意味内容がはっきりしておらないが、それでもそれらは全く無差別に使われているのではないのであって、およその意味領域は存在している。それにしても、*nos volontés, qu'on peut nommer des émotions de l'âme qui se rapportent à elle, mais qui sont causées par elle-même*, (I, 29) という表現は珍しい。こういう「心の情動」から「情念」を区別するために、後者は或る種の精気運動によって惹きおこされ、保持せられ、強められると附言されているのである。

第27節に述べられた情念の定義とならんで今一つ重要な発言が1645年10月6日付のエリザベット宛の手紙のなかに見出される。

『意志の協力なしに、したがって意志より生ずるいかなる働きもなしに、単に脳のなかにある印象だけで、このように心のなかに起こさせられるところのあらゆる想念を一般にパッション(受動、情念)と名づけることができるのであります。なぜなら、すべて能動でないものは受動ですから。』“on peut généralement nommer passions toutes les pensées qui sont ainsi excitées en l'âme sans le concours de sa volonté, et par conséquent, sans aucune action qui vienne d'elle, par les seuls impressions qui sont dans le cerveau, car tout ce qui n'est point action est passion.” (A. T. IV p.310)

さらに引き続いて『ひとは普通パッションという名称を、動物精気の或る特別な刺激によって惹きおこされる想念にのみ限っています。なぜなら、外部の対象、もしくは身体の内的状態より生じる想念、たとえば、色、音、匂いの知覚、飢え、渇き、苦痛、その他これに類するものは、あるものは外的知覚(サンチマン)、他のものは内的感覚(サンチマン)と名づけられているからであります。』(ibid. p.310—311)と記されている。この書翰に見られる *passions* の規定は「情念論」の定義と根本的に異なるものでない。しかし叙述の仕方は大部異なっている。簡潔な点では「情念論」の方がずっとすぐれている。ただ書翰の方では、本来の意味の *passions* とそうでないもの、それに類似していたり、往々それと混同さ

れるものをいくつか区別しているの、ことばの用法がはっきりするので重宝である。つまり passions に縁の深いものとして sentiments extérieurs (外的感覚), sentiments intérieurs (内的感覚), rêveries (夢想), imagination (想像), inclinations ou habitudes qui disposent à quelque passion (なんらかの情念をすぐに起こさせるような傾向や習慣) などがここで語られているのである。

ともあれ, passions はもともと能動に対する受動の意味をもち、それが心の能動となるとき、それはすぐれて「意志」を意味し、心の受動は広く「知覚」を意味するようだが、動物精気の或る種の運動によって惹きおこされ、保持され、強められるところの passions de l'âmeこそ、われわれが普通「情念」と呼んでいるものを指しているようである。併しそれだけに、意志と知覚、もっと限定して、意志と情念との背反性とそれを踏まえた上での相互の関わり方について充分考えてみる必要があろう。⁽⁴⁾

注(1) リヴォーは、デカルトに於いて思惟と運動とのからみ合いに関する説明は不明瞭であるが、この定義はその不明瞭さの痕跡を残していると指摘する。

“Selon la lettre de cette définition, le sentiment est le reflet dans l'âme d'un phénomène corporel. Inversement, chaque opération de l'âme peut s'accompagner d'un mouvement correspondant du corps.” (Rivaud, Histoire de la philosophie, III, p.148)

それにしてもこの定義は情念の現象を心なり身体なりに直接関係せしめて説いているものではなく、むしろ心・身の結合に即して説いているもので、デカルトの並々ならぬ配慮が認められる。つまり、情念は「心の受動」ではあるが、精気運動によって惹きおこされるもの、すなわち身体を介して生起するものとなって来る。

ガーディナーは、デカルトのこの定義に見られる perceptions, sentiments, émotions はそれぞれ一見異なった経験様式を示しているが、おそらくこれは同一の経験を異なった観点から見たものであろうと言っている。(Gardiner, Feeling and Emotion, 矢田部・秋重訳, p.137)

注(2) 最終的・最近因については51節に次のような記述がある。

“la dernière et plus prochaine cause des passions de l'âme n'est autre que l'agitation, dont les esprits meuvent la petite glande qui est au milieu du cerveau.” (P.A. I, 51)

注(3) “des deux sortes de pensées que j'ai distinguées en l'âme, dont les

unes sont les *actions*, à savoir ses *volontés*, les autres ses *passions*, en prenant ce mot en sa plus générale significasion, qui comprend toutes sortes de perceptions” (P.A. I, 41)

注(4) たとえばランダルは次のような点に注目している。即ち、デカルトにとって *perceptions*, *images*, *emotions*, *volitions* などは等しく「思惟の様態」となったのであるからして, *sensitive soul* と *rational soul* という伝統的なアリストテレス的区分 (*sensing & imagination* は *particular & material* であり, それに対して *thinking* は *universal & immaterial* だという区別もこの中にふくめて) は消滅してしまった。つまり両者ともデカルトの言う *penser* の中に含まれてしまうのである。そうして, その代りに, 思惟の能動の様態と受動の様態との区別が登場して来る。前者は *will* であり, 後者には *ideas*, *perceptions*, *emotions* などがそのうちに含まれて来る。また理性的認識に於いてすら, 心は受動的に世界の印象を受ける。だが, 意志は能動的で, 悟性が提示する観念に対して自由に同意を与えたり, 同意を拒否したりする。この同意を与えたり・差し控えたりするのをデカルトは「判断」と呼んでおり, そうして, このような判断の自由は凡べての人が所有するものなのである。(J.H. Randall, *The Career of Philosophy*, 1962, p.392)

このランダルの注意は大切である。ただし, 「情念論」に見られる能動としての意志と受動としての知覚の対立と, 「哲学原理」に見られる思惟の二つの様態, すなわち, 知覚する悟性と決定する意志との対立 (Princ. I, 32) は全くおなじ視点からとらえられたものではない。また「情念論」では受動としての知覚の中に *perceptions de nos volontés* という疑点の多いことばがはいっており, 勝義における悟性の働きはそこで言及されていない。能動としての意志についてはよく考えてみなければなるまい。

5. 意志と情念

前節の註で述べておいたように「情念論」では意志は能動として, 受動としての知覚に対立せしめられているが, 「哲学原理」では意志は悟性に対立せしめられて, 欲望, 忌避, 肯定, 否定, 懷疑などの働きなどをその様態としてもつ意欲作用と解せられている。デカルトの意志論について全面的に論ずるのは甚だ厄介なことであり, わたしとしてもまだ十分に準備できていないが, 少なくとも「情念論」を問題にするかぎり, 意志と情念との関係については大凡の見通しをつけておかなければならない。

情念の定義（I, 27）で明かに示されているように、情念とは心のエモションであって、それは精気によって惹き起こされ、保持され、強化されるものであるとすれば、簡単に言って情念を支えるものは精気の運動であると言えよう。さらに、情念の主要な作用は「情念が身体をして取らしめようとする態度を、心が意欲するように心を刺戟し且つそう仕向ける」（I, 40）点にあるとするならば、情念は心の働きと身体の運動との両方に参与し関連をもつことになる。したがって、意志と情念との関わりといっても、両者の本性的な葛藤は考えられないし、また意志が情念を完全に沈黙させたり消去したりすることもあり得ないわけである。ところが、a.41では『意志はその本性上自由なものであり、決して抑圧されるものでない』として意志に対しては非常に大きな力が認められている。それが結局情念に対する意志の支配権という考え方につらなって来るわけであるが、一体情念の支配とか統御とかはどのような状態を指すのであるかが問われねばなるまい。

a.45からa.50までは情念に対する心（âme）の支配について説かれているがその論述は必ずしも明確ではない。a.45では「われわれの情念もまた、意志の働きによって直接に刺戟されもしなければ除去されもしない」と述べ、その例として、心のなかに大胆さを刺戟したり、恐怖を除いたりするためには、意志するだけでは不十分で、危険が大きくないとか、逃亡よりも防禦の方が安全だとか、勝てば名誉や喜びが得られるが、逃げれば悔恨と恥辱しか残らないなどの、我々が納得する理由なり、事物なり、実例なりをよく考えてみる必要があると説いているのであるから、意志の情念に対する働きかけは直接的にでなくして、言わば間接的に、或いは我々が持ちたいと思う情念に普通結合しているものを表象したり、或いは我々が斥けたいとおもう情念に反対するものを表象したりすることによって可能となって来る。ここには一種の知的な表象が介在している。

またa.46では、心が情念を直ちに統御できぬ理由として、殆どすべての情念が心臓のなかに、また血液全体や精気のなかに或る種のエモション（動揺、情動）を伴っているがゆえに、心は微弱な情念を抑えることはできるが、きわめて強烈な情念は抑えつけられず、この動揺が強烈なあいだ意志がなし得る最大のことはその動揺のあたえる結果に従わずに、動揺によって生起する身体の運動のいくつかを抑止することである。

確かに情念はなんらかの動揺を伴っている。その動揺が強く烈しいときにはそれは一種の乱れ（dérèglement）であると言ってよい。デカルトはそのような乱れの抑止に大きな力点をおいていると見られる。

意志によってもっとも容易に情念に打ち勝ち、そして情念に伴う身体運動を抑えることのできる人びとは確にもっとも強い心をもっているわけである。もっとも弱い心とは意志が或る判断に従っていく決心をせずに、絶えずその場の情念によって引きずられていく状態のものを指している。それに対して もっとも強い心⁽¹⁾とは、意志本来の武器、すなわち、善・悪の認識についての 確固とした判断 (des jugements fermes et déterminés touchant la connaissance du bien et du mal) に従って意志がおのが生命活動を導こうと決心する態度である。「善・悪の認識に関しての確固とした判断」(I, 48)こそデカルトがもっとも尊重するものであり、デカルト倫理学の核心をなすものと言ってよいが、その徳目的な表現が後述する *générosité* (高邁)にほかならない。

意志による情念の統御とは上に述べたような確固とした判断にしたがって情念を統御していくことであって、単に情念の力を減殺することではなかった。しかもデカルトがこのような見解を打ち出した理由としては、当時のさまざまな思想的立場に対決するためであったろうことは推察に難くないが、その意志説が *du Vair* および *François de Sales* の伝統を引いているという考え方は傾聴に値しよう。⁽²⁾

ともあれ 第一部のつづめを成すところの a.49 と a.50 とは情念の統御を標榜するデカルト倫理説の中核を表現しており、ただ情念の赴くままに右に傾き左に傾く弱き心を難じ、真理の認識のみにもとづく固い決意にしたがう意志の立場を強調する。しかも、この強い心は特定の人々にのみ許されるものでなくして、凡べての人に可能なものと見ているのであって、そこから「指導よろしきを得れば、情念に対して絶対的な力をもち得ないほど弱い心は存在しない」(I, 50)というきびしい命題が掲げられるのである。

意志と情念との関係は結局意志による情念の統御という形で決着がつけられるものではあるが、この問題は後でジェネロジテを論ずるときもう一度現れて来るので、今はこれくらいにして、次節以下でデカルトが取り出した基本的情念と特殊情念の若干のものについて少し検討を進めていきたい。(未完)

注(1) 同じ内容のことばが a.49 では「真理の認識にのみもとづく決意」(les résolutions qui ne sont appuyées que sur la connaissance de la vérité) となっており、したがって a.48 の jugements はむしろ「決断」と訳した方が適当であろう。

注(2) S. Levi, French Moralists, 1964, p. 271

また、心の強さをためさない人は、意志が意志本来の武器をもって闘うようにせず、単に或る情念に抵抗するため、他の或る情念が提供してくれる武器をもって闘わせようとする、という場合のこの論者は **Montaigne** を指していると注釈している。（*ibid.* p. 272）